

大 阪 大 学

実施報告

(1) 実施責任者報告

大阪大学薬学部教授 近藤雅臣
(開放講座運営委員会委員長)

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

大阪大学における公開講座としては、まず、昭和43年以来一般社会人を対象とした開放講座(定員1,500名、講義回数14回、本学講堂使用)を挙げることができ、本学における学問、研究の成果を一般社会に開放することを目的としている。一方放送講座としては、これと並列してラジオ・テレビ講座を開講し、これら3講座を関連させつつ大学の主体性のもとに実施することとしている。

このように本学においては3種類の公開講座の運営に努力しているのであるが、これは本学が地域社会への大学教育の開放という課題に重大な関心をもつことを示すものであって、このため全学的な開放講座運営委員会を設置し、実施体制を確立している。本委員会においては小委員会を設け、3講座の企画を行い、ラジオ及びテレビ講座に関しては実施の細目の検討を主として推進する部局(主管部局)を定め、相互に緊密な連絡を取りながら運営に当たることにしている。なお、本学では3年を1クールとしてそれまでの各講座の見直しを行い、実施体制、講座の継続等につき検討を行っている。

これらの公開講座は、その目的からしてより多くの市民が受講できる機会が得られることが重要であるので、講座に関する情報を社会全般に周知させる必要がある。このため放送メディアを通じての家庭内への伝達ならびに企業、公的機関などへの研修としての参加の呼びかけなどを行い、多くの受講生を得ている。これらの受講生については受講者登録制度をとり、登録者には、1. テキストの実費領布、2. スクーリングへの参加、3. 再視聴センターの利用等の便宜を計っている。

このように放送局その他の機関との協力関係は対応する機関の好意的な協力により円滑に推進されているが、放送時間帯など今後検討すべき点もあり、理想的には欧米で行われているような大学独自の放送網の設置に関しても今後検討すべきものと考えられる。

2. テーマの選定とそのねらいについて

(ラジオ講座) 日本研究の先達

国際化が言われる現在、日本あるいは日本文化を新たな文脈で見直すことが要請されている。そこで本講座では、近代以降の日本研究のさまざまな分野における先達の業績をあらためてふりかえ

ることで、そうした要請に応えることをねらいとした。また、そのようなテーマを設定することで、多様な研究分野からなる文学部(本講座担当部局)の長所を生かすことができると考えた。

(テレビ講座) 自然のしくみー化学の眼ー

我々を取り巻く自然を理解するということは、自然界を構成する物質を理解することである。物質を意味する英語 matter は、ラテン語では mother と同じ語源をもち、物質はすべてを生み出す根源として捉えられてきた。物質がどのように成立しているかについては古代より多くの哲学が語られてきたが、中世の錬金術を経て次第に科学の対象となり、20世紀に入って急速な進歩を遂げた。高温超伝導に対する最近のフィーバーぶりを見ても、新物質に対する社会的関心の強さを伺わせるのに充分である。

我々の身の回りに起こることの多くは、化学的現象である。我々の身体自身も多くの高分子物質からできており、多数の生化学反応が調和を保ちながら起こって、初めて生命が維持される。このように化学は我々に馴染み深い学問であるにも拘らず、化学教育の不適切さから多くの化学嫌いを生み出している。化学がいかに身近な学問であるかということ、数多くの事例と、それが何故なのかという観点から説明し、さらに現代の最先端技術とどのようなかわりを持つかということ、平易に解説し、多くの人々が化学に興味を持つことをねらいとした。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

番組については、全体の構想をたてるために、まず、全体テーマと各回の内容との関連性、講座全体の統一性を考慮したテキスト原稿の作成を各講師に依頼し、各講師の作成したテキスト原稿を主任講師が前述した事項について検討・調整し、それを番組のシナリオ作成の原案とした。この原案にもとづきシナリオ作成のうえ、シナリオライターと各講師が打合せをし番組内容を決定した。このように、テキスト原稿ーシナリオー番組という形にはなるが、番組だけで講義内容が理解できるようにし、ラジオ・テレビ各講座それぞれ以下の点に制作過程で工夫をこらした。

(ラジオ講座)

- ① 13回それぞれ異なる日本研究の先達を取り上げたため、諸先達の歩み、業績を理解しやすく、又、興味を持って聞きうるようにシナリオを作成した。
- ② 番組の活性化を図るため、女性アナウンサーを起用し、対談形式で番組を構成した。
- ③ 講義の始めにその回の「ねらい」を説明する他、主題の人物に関するエピソード等を挿入した。

(テレビ講座)

- ① テキスト原稿の中で、特に重要な点を画になり易い形にすることに留意し、シナリオを作成した。
- ② 第1回は「総論」として位置づけ、講座全体の流れを視聴者に示した。
- ③ 第2回以降主任講師が冒頭に出席し、その回の概要を説明した。
- ④ 各回ともアナウンサーとの対話形式を取り、実験・デモンストレーション・図表パネル・テロップを多用し、講師の話として終わるのではなく、視覚として残るようにした。

テキストについては、講義を補完するものではあるが、上述のように必ずしも放送内容に合致し

ているとは限らない。しかしながら、ラジオ・テレビ両講座とも独立した著作物としてテキストのみでも講義のテーマ・内容が把握できるように編集し、特にテレビ講座の場合、難解な数式や化学式はできるだけ避け、普段なに気なく使っている物質の作用が何故なのかという原理の記述に主眼を置いた。

学習指導については、予め受講生から寄せられた質問カードによる質疑応答を中心として番組、テキストだけでは説明し得なかった部分の解説の他、講義の補足説明を行うことで、より深い理解と、これからの学習意欲を高めるための契機となるものをめざした。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

（ラジオ講座）

毎回、異なる13人の人物について、その歩み、先駆的な業績、あるいは研究上の問題点を平易に放送した今回のラジオ講座は、多くの聴取者の関心を呼んだ。そのことは、数多くの受講生が熱心にスクーリングへ参加したことによって裏づけられており、本講座は受講生が日本認識のあり方を学習するための一つの契機になりえたと思われる。

（テレビ講座）

講師の中には学会発表なみの高度なものや、良く咀嚼されたものなど、レベルは必ずしも整っていなかったが、それぞれ得意とする分野で工夫をこらし、また、受講生からは予想以上の反響が寄せられており、十分な学習効果があったと思われる。これは、純粋科学を志す理学部の性格上、極めて基礎的で地味な学問を、高度技術に偏重しがちな現代社会におもねることなく、真正面から取り組んだことに、基礎科学の重要性を認識した数多くの受講生が共感したからに違いない。スクーリング時に寄せられた質問25件は多岐にわたっていたが、こちらの意図するレベルまでの理解が行われていたことを示す内容のものが多く、講義のまとめや質問事項への回答を熱心にメモをとる姿や会場の雰囲気から考えて、多彩なレベルの受講生にかなりの満足を与えたものと感じられた。

5. 印刷教材の作成過程について

（ラジオ講座）

受講生にとって身近なもの、読みやすいものとするため、次の点に留意のうえ各担当講師が執筆した。

- ①わかりやすい表現で執筆するため、文体は原則として敬体（ですます調）を用いる。
- ②「一口メモ」を設け、受講生の学習意欲を高める。
- ③各章の冒頭に数行の要旨を掲げ、その章のねらいを明らかにする。
- ④各回の人物写真（図）を掲載する。

（テレビ講座）

教材作成に当たっては、受講生用テキストとして配布する以外に、独立の著作物としても出版・市販を希望する講師が多かったので、次の点に留意の上、各担当講師が執筆した。

大阪大学

- ①低分子物質から高分子物質まで系統的に重要な点を記述する。厳密さを失わずにいろいろな譬えをいれる。
- ②各章の冒頭に数行の要旨を掲げ、その章のねらいを明らかにする。
- ③数式や化学式は最小限に止め、図やイラストを多用して理解を助ける。文章はやさしい口語体とする。
- ④2色刷りとして重要な語句や図の一部を強調する。
- ⑤一口メモとしてエピソード的な記述を入れる。
- ⑥記述しきれなかった部分は参考文献を列記し、その特徴を述べる。

原稿は各章を400字づつ原稿用紙20～30枚、62年2月末日締切で依頼した。受理した原稿は主任講師が通読し、用語の統一や修正加筆を依頼の上、放送局と出版社に手渡した。校正は、初校については著者に依頼したが、再校以降は時間の制約上、出版社に依頼せざるを得なかった状況にあり、第一刷では誤植が目立った。この点は第二刷増刷の際に徹底的に改訂した。

6. 学習指導の実施状況について

両講座とも放送番組終了後、講師全員の出席を原則としてスクーリングを実施し、全体のまとめと各講義内容の補足説明及び学習内容の質疑応答を行った。

(ラジオ講座)

日 時	場 所	出 席 者		
		男	女	計
昭和63年1月16日 午後2時～4時	豊中市待兼山町1-1 文・法・経講義棟	49名	27名	76名

スクーリング出席者全員に共通する内容とすることに留意し、出席講師による講義のまとめ、補足説明及び予め受講生から寄せられた質問カードによる質疑応答を実施し、講師による補足説明では特に、番組では説明し得なかった部分の解説を中心に行った。

(テレビ講座)

日 時	場 所	出 席 者		
		男	女	計
昭和63年1月9日 午後2時～5時	豊中市待兼山町1-1 基礎工学部国際棟	70名	31名	101名

昨年度までのスクーリングの実績をもとに、昨年使用した会場を準備したが、予想を上回る出席者の数で講師・受講生ともに多少窮屈な思いをした。補講1件、予め寄せられた質問25件への回答だけで予定を1時間も越えたが、その間も殆ど帰る人もなく、最後まで熱心にメモを取る姿が見られた。質問は高度の内容のものも数多く含まれており、受講生の質の高さを伺わせると同時に、生涯学習が広く、確実に社会に浸透してきているように感じられた。

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

地域における文化の興隆、定着そして更なる発展を期するためには、その地域に生活する市民の知識、感性などの向上が必須の条件であり、これらを補完すべき手段の選択が重要な課題となるといえる。大学教育の地域社会への開放はこの目的に対し貢献できる手段の一つであるといえ、大学における最新の学問、研究の内容を公開し市民の知識向上に資するとともに生涯学習への意欲を高めるための有効な手掛りとなるものといえる。放送講座はその方法の一つであり、放送というマスメディアを用いた特定の対象にとらわれない社会全般への知識、情報の開放といえ、社会の各層に広く普及させるための役割は大きいものといえる。また本学では別に講堂において開放講座を実施しているが、放送講座ほど対象は広汎でないものの、講師と直接対面して聴講できるという大学教育との直接的な接触が計られるという特長を市民が享受できるという利点がある。一方、これらの公開講座は地域社会への貢献というだけでなく、逆に地域社会からのリアクションが大学自らの方向性に重要な示唆を与えることも考えられる。本学の目標を、“地域に生き世界に伸びる”という言葉で表現しているが、地域社会における知的生活と融合しつつそれぞれの分野で世界に進展することが望ましく、その意味ではこれらの事業は本学の目標と合致するものといえる。そして、この試みは大学と地域社会との密接な協力体制の確立を図るものであって、両者にとって貢献し合う重要な場であるといえる。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

本学においては、昭和55年に放送講座を開設して以来終始一貫して研究成果の地域社会への開放を目的としており、現在授業への活用については、具体的な検討はなされていない。しかし、今回放映されたテレビ講座の一部教材は、本学理学部高分子学科2年生対象の「化学特論」の授業に既に利用され、今後も利用される計画である。講座の中で使われたデモンストレーションの多くは、講義実験として行うには複雑な手続きや装置を必要とするので、ビデオ放映を利用することは極めて適切である。今後講座の担当講師に授業への活用を協力願い、その意見等を基に検討を進めていきたい。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

本学の実施体制は、開放講座運営委員会が次期放送講座担当部局を決定し、当該部局が独自で放送内容を企画、立案する主管部局制をとっており、毎年主管部局が変わり当該担当部局にとっては

過去に例のない企画であり、更に学部ごとの研究内容に相違があるため、前年度の番組製作から得られたものが直ちに次年度の番組製作に生かすことができない。このため再び新たに講座内容を理解させるための方法等を考えねばならないといったことがあるため、番組を製作するうえで放送関係者とできるだけ早い時期からの打合せにより企画・立案を進め、大学の研究成果を番組になじみやすい講座内容として構成する必要がある。しかし実際は製作局が決定して始めて、打合せ会等の具体的作業に入るため、講師の日程等との関係でどうしても製作スケジュールが短期間となり、番組内容等についての検討時間が短くならざるを得ない。また、講座内容の検討や原稿作成の時期が入学試験の時期と重なり、各講師予定者の最も忙しい時期となるため十分な検討がなしにくいといったことがある。

また、放送公開講座のテープの二次利用について、受講生や教育関係機関等から希望が多数寄せられている。大学における学術研究の成果の開放であり、大学開放の意義からも、より広汎に利用できるように検討されてしかるべきであると思われる。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 自然のしくみ ー化学の眼ー

主任講師： 理学部教授 菅 宏

大学放送公開講座の使命である「開かれた大学」「教育・研究の社会的還元」と言う言葉ほど、言うは易く行うは難しきものはないことを痛切に感じた一年である。大学の姿・最先端の研究成果を披露するだけならば、もっと良い方法があるであろう。13回という限られた枠の中で、まとまった1つの流れを形成し、しかも同じ位のレベルで通すということは至難の業である。しかも講師は、映像文化の制作に対して殆ど素人の集団である。受講対象者の多様性と同時に講師陣の多様性も認識を新たにした次第である。

理学部が主管部局として、テレビ講座を担当することが決めたのは昭和60年である。直ちに理学部テレビ講座委員会が設けられ、各学科から代表2名が出て、熱心な討議が繰り返された。最終的に「自然のしくみー化学の眼ー」を主題とすることが決められた。その時点で他学部から申入れがあり、都合で1年先に延期されることになったが、これは却って幸いした。その間に各講師はテーマを心に温め、何を核にすればよいかを熟成する時間が培えたからである。この意味で私は、担当部局を少なくとも3年前に決めておくことを提案したい。実際に動き出すのは半年前としても、テーマの醗酵に、より多くの時間がかけられるからであり、これは何事によらず重要なことである。

最も困難に感じたことは、年齢・学歴・職歴・興味などが多種多様な受講生のどのレベルに焦点を合わせるかという点であった。大学一年生程度といっても各講師が抱くイメージはこれまた千差万別である。でき上がったテキストもそういう意味で各章の難易度に大きな差が出た。しかしこれは対象をはっきり指定できる教科書ではなく、受講層の多様性を考えると或る意味では良かったと思われる。

市販用テキストが出版後4ヶ月にして版を重ねる状態になったのも、この状況とは無縁ではないであろう。

13回の各テーマの名前と内容の選択は助教授・助手の人にも入ってもらって知恵をお借りした。難解なテキストを平易な形でシナリオ作りをするのに放送局とは何回もやりとりが重ねられた。出版社には読み易い形の変形版をお願いし、極力イラストや一口メモを入れて頂いた。大学事務局にはパンフレットの発送その他で大変お世話になった。その他、数多くの人々の有形・無形の御支援にこの場をお借りして御礼申し上げたい。公開講座には実に膨大なエネルギーの結集が必要となる。

蓋をあけるまで一番の心配は、基礎科学の中でも地味な化学を中心テーマにして、13回もの間視聴者が見飽きしないかという点であった。しかし、案ずるより生むが易し、予想以上の反響が寄せられた。これは、とにかく技術偏重におちいりがちな現代社会の中に、なお基礎科学の重要性を認識して下さる方々が大勢おられるということである。一見、壮大な無駄に見える理学部の研究成果が、いずれは開花して人類の繁栄に希望を与える日があることを信じて下さったからで、意を強くした次第である。スクーリングには収容能力を上廻る受講生が詰めかけ、熱心にメモをとる姿が見られた。予定を1時間越すスクーリングが終わった後でも、熱心に個人的質問をされる方の姿を見ると、年をとっても学習意欲のおとろえない受講者の姿に感動すら憶えたのである。学習したのは、実は我々の側ではなかろうか？

(ラジオ科目) 日本研究の先達

主任講師： 文学部教授 子安宣邦

今回のラジオ講座は、日本研究のあり方を見直すという現今の要請にこたえる形で、近代以降の日本研究の先達の業績をふりかえるというテーマで行うこととした。「日本研究の先達」というテーマを組むことで、今回の講座を担当した文学部の長所、すなわち哲学、史学、文学、美学といった多様な分野からなる文学部の長所をも生かすことができると考えた。「日本研究の先達」ということで当然考えうるような先駆者をリスト・アップし各講師と交渉し、何度かねり直して、実施したような形にまとまった。結果としては非常に興味ある人物たちにまとまったと思う。

今回の放送によって、はじめてその業績を知ったという人物もいれば、著名だがその歩みを初めて聞くという人物もいるし、その仕事のもつ問題点を専門家の立場から始めて解説されたという人物もいる。企画担当者としては、今回の企画に自らかなり高い点を与えている。そして、聴取者の多くの興味を呼んだらうということも信じて疑わない。

しかし、実施の担当者としての率直な感想を言えば、大学における通常の務めの上にこのラジオ講座の主任講師を引き受け、企画立案、講師との交渉、テキストの作成、放送実施、スクーリング実施、実施報告書作成、シンポジウム出席等々一連の仕事はかなりの負担であった。

制作報告

(1) 制作責任者報告(テレビ)

毎日放送テレビ編成局長兼教育部長 小林正史

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

毎日放送が大学放送講座を担当して4年になる。大阪大学は各学部単位での講座担当という形をとっているが、1年目の微生物研究所以来、レーザー核研究所、基礎工学部と、一貫して理科学系が続き、今年は理学部が担当された。昨今の社会的風潮として、応用科学に一般の興味が集中するのが常であり、科学の基礎部門である化学に対しては、認識度が低いと言われるが、このテレビ講座を契機として、実生活とのかかわりをもとに化学についての一般的認識を高めることが今年の講座の大きな目的であったと思う。担当講師陣とは、はじめてのおつきあいであったが、例年にもまして、綿密な打ち合せを繰り返し、リハーサルを含む長時間の録画作業が行えたのも、講師の方々のこのテレビ講座にお寄せいただいた熱意によるところである。また実生活面との関連から先端的な工業製品の撮影なども数多く行ったが、担当講師の適切なアドバイスを得ていずれもスムーズに進行した。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

原子・分子の性質、運動といった基礎的な領域を探求する化学の世界をどんな風に映像化するかという点に、今回は最も努力がはらわれたと思う。

コンピュータでの解析や実験による解説が、前年にも増して多用された。

例えば、かいこ蛾によるフェロモンの実験や、高分子合成反応でナイロンを作り出す実験など、実生活とのかかわり、わかりやすさと同時に映像としてインパクトの強い実験を取りあげた。その結果として、化学実験の重要性についての認識がこの番組を通じて多少とも高まったのではないかと自負している。

3. 番組の視聴状況と成果(評価、反応)について

放送時間が日曜日の早朝ということで、基準値は高いとは言えないが、放送13回の平均視聴率は0.41(ビデオリサーチ)で昨年度0.28(ビデオリサーチ)に比べてかなり上昇している。

あきらかに意図的視聴と考えられるので、この種の番組としてはまずまずの成果といえるのではないか。1月9日(土)大阪大学内で行なわれたスクーリングには101人の参加があり、予定時間を1時間以上オーバーして熱心な質疑応答が展開された。

(因みに受講者数は、60年度 465人 61年度 611人 62年度 700人)
生涯学習の一環としてのこの番組のもつ意義が通感される。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

放送講座の場合、理科系の講座と文科系の講座とでは、講義のスタイルや映像化の手法までかなり違ったものになる筈である。特に化学といった基礎科学を扱う場合、学問的な正確さを保ちながらテレビのためのモディフィケーションがどの程度、あるいはどんな点で許されるのか。

例えば「原子を見せる」といったケースを考えてみても、様々な問題をはらんでいることがわかってきた。視聴ターゲットをどこにおくかといった問題ともからんで、受講者の理解度にかかなりの幅があることも考慮に入れた上で、各ケース毎に解決していく方法をとったが、表現を統一する方が良いのかどうか、検討課題である。また化学実験にもコンピュータがどしどし取り入れられているので、実験結果が数値としてはっきり出てくる反面、予備知識の無い視聴者には経過がわかりにくいという面もある。テレビでどう対応するか、これも今後の検討課題である

(2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) 自然のしくみ ー化学の眼ー

制作担当者： 毎日放送テレビ編成局教育部部長 岸本 哲 雄

1. 構成等について

「自然のしくみー化学の眼ー」というタイトルからただちに察せられるように、今年度の講座は、自然界の探求を目的とする理科系科学の原点としての化学、原子・分子の構造を基点として、高分子を含んだ物質のなりたちや機能についての理解を化学の眼を通して獲得することを目指したものであった。

科学の基礎的な問題であるとともに、いわば最も地味な分野を取り扱うもので、これがテレビというメディアとどうかかわっていくのか。まず、この点から構成が考えられねばならなかった。視覚効果という点では、各種の実験を多用し、原子・分子等のイラストには、漫画的処理をほどこしたり、実生活に即したアナロジーの助けを借りたりした。特に高分子化学については、この分野の学問的成果とも言える多種多様の工業製品の紹介によって基礎科学と実生活とのつながりを明らかにするよう努力した。

講座の内容はかなり高度で、精細な説明と理論が開陳されたが、結果として視聴者の関心は高く、また十分に理解できるものになったのは、講師の方々のテレビに対する並々ならぬご理解とご協力を得た賜物である。また、番組の冒頭で主任講師のレギュラー出演による各回テーマの概括的な紹介を行った。

平均1分20秒程度の短い時間でテーマの要点を踏まれた紹介は、講座の導入としてはまことに適切で、視聴者に予備知識を与えるとともに講座への興味を起こさせることに貢献したと思う。

2. 問題点

化学が取り扱う原子や分子は、その形状はもちろん、それらの運動も本来目に見えないものであり、それを視覚化する過程で、学問的な正確を保ちながら理解しやすい映像化への工夫には、まだまだ充分でないところが多かったと思う。むづかしい問題には違いないが、コンピュータの導入や化学実験に対するスタッフの理解を深めることによって解決していきたい。

化学式についても今回はなるべく少なくする方針を取り、そのため、講師の方々に余分の負担をかけたと思うが、むしろ避けるよりは理解しやすい化学式の見せ方を根本的に検討すべきではないか。

今後の課題としたい。

(1) 制作責任者報告（ラジオ）

近畿放送ラジオ制作部部長 武部 宏

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

大学教育の地域社会への開放活動の一環として、放送を通じて、大学の研究成果を広く開放するという基本理念のもと、講座内容のレベルは大学の一般教養課程の学生を想定しつつ、より多くの一般聴取者をも、たまたまであれ、聞くことによって関心を持つことへのきっかけになればと考えております。

今回は国際化社会いわれる中で、日本をもう一度とらえ直す事も大切だというわけで、主任、副主任講師の子安先生、真田先生をはじめ13人の各講座担当の先生方には、テキスト原稿の執筆以外にもお忙しい中をさまざまなアドバイス、取材、調査等にご協力いただきました。

また、大阪大学庶務部の関係職員の方々にもご迷惑をおかけしましたが、適切なご指導をいただきました。

今年度も、その学問的レベルを下げずに、より広い層の人達に聞いて関心を持っていただくという目的に対して、より前進したものと考えています。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

前回同様、先生方からいただきましたテキストを基に放送用のシナリオの構成を練り上げる事に時間をかけました。

番組全体の流れ、どこに重点を置くか、どうすれば平易に表現できるかという基本と講座の緊張をやわらげるコーヒブレイクとその内容の打合せ、先生御自身の主張をどう表現していただくか等々です。

本番収録時には、できるだけリラックスして自由にお話しただけよう脱線、余談もまじえて時間制限なしでテープをまわすようにしました。

講座ご担当の各先生方には、それぞれテーマの人物にかかわるエピソード、インタビュー、選曲等々番組に変化をつける様々な御助言をいただき、心よく御協力いただきました事で、それが先生方の人柄をもうかがいしれる13回、13様の番組となって放送されました。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

本年度の放送講座は、少し専門的関心をお持ちの方々には大変面白いテーマではありましたが、一般的聴取者にとっては関心が薄いかなという予想でした。

聴取状況、最高が男25才～39才が最高、女40才～59才がそれに次ぐという結果は、カルチャー指向も含めて、予想どおりと見ています。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

本講座は13回を13人の先生がそれぞれ御担当いただくという面で、それぞれの特色が出ていますが、放送番組としては各先生の経験、個性により、聞きやすさという点ではちがいが出ています。ただ大阪大学の場合はよく話し合われていてシリーズを通しての一貫性は貫かれています。やはり問題は45分という時間の中で大きなテーマをいかに絞り込むか、どこに重点を置くかという面と先生方の熱意との背反をどう調整できるかでありました。

(2) 番組制作担当者の所見

（ラジオ科目） 日本研究の先達

制作担当者： 近畿放送ラジオ制作部ディレクター 小川重和

本年度の放送公開講座では「日本研究の先達」というテーマのもと、13人の「先達」を大阪大学文学部の13人の先生方が現代の視点からそれぞれの生涯、業績、その意義を時代背景とともにお話しいただきました。

より多くの人に放送を聞いていただきたいという制作者の立場からは、一般聴取者にとって、とりあげる人物の知名度の低さ、その業績への関心度等で少し辛いかな、という面もありましたが、講座の主眼である国際化社会の中での日本を見つめなおすという点で、今回の放送は有意義であったと考えています。

制作にあたりましては、できるだけ聞きやすく、という事で次のような方法をとりました。

○先生方からいただいたテキスト原稿を分解して、放送の流れにそったアナウンサーとの対話形式のシナリオを作成する。

○アナウンサーは進行役であり、かつ一般聴取者の代表としての立場に立つ。

○本番収録時には、あまり時間を気にせず、話が脱線してもかまわずに対話を進める。

○できるだけ講師の先生自身の、そのテーマ、人物に対する思い入れ、評価等をお話いただく。

大阪大学

○より、変化をつけるためコーヒープレイクを設け、テーマの人物にかかわるエピソード等々をお話しいただき、息抜きの時間とする。

放送が終了しての感想はといいますと、やはり45分という限られた時間の中で、多大な業績をあげた人物の、その一部にせよ、クローズアップすることの現実としての無理との葛藤であったような気がします。

聴 取 率

(ラジオ科目) 日本研究の先達

調査日 昭和62年11月8日(日)
午後9時～9時45分番組名 大阪大学放送講座
第4回「横山 重 ～日本の心を探る資料の紹介者として～」

KBSラジオ聴取状況

聴取率 0.5% (占拠率: 15.2%)

{	1%: 約160,000人
	KBSエリア内人口=16,455,922人

※ (株)ビデオ・リサーチによる

参 考

- 聴取率全体 0.5%
- 男女別 男: 0.6%、女: 0.5%
- 区分最高 ①男25才～39才 1.8%
②女40才～59才 1.4%

以下 ※

(参 考)

回数	講師名	主な打合せ日	スタジオ収録日	テープ完成
1	徳川宗賢	6月30日	7月14日	9月14日
2	真田信治	7月6日	7月27日	9月24日
3	伊井春樹	7月20日	8月21日	9月14日
4	信多純一	8月8日	9月10日	10月16日
5	神林恒道	8月4日	9月3日	10月14日
6	石田正	8月17日	8月24日	10月23日
7	加地伸行	8月17日	8月24日	10月28日
8	子安宣邦	10月5日	10月16日	11月12日
9	脇田修	9月16日	9月22日	11月17日
10	山口修	11月16日	12月10日	10月14日
11	小松和彦	10月13日	10月27日	12月4日
12	矢守一彦	10月26日	11月24日	12月7日
13	高橋正	11月21日	12月22日	12月29日

講座の概要

<科目の概要>

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法
自然のしくみ -化学の眼- (テレビ)	自然界の物質を構成する原子・分子の構造、性質、絶えざる変化などを見つめ、さらには、新しい文明の開拓に寄与している化学を紹介し、化学という学問の役割を考察する。	人類は火を意のままに扱い、身近に存在する「もの」を利用して生活してきた。複雑な混ざり物から必要とする「もの」を抽出する技術もあみ出してきた。その裡に「もの」とは何か?という素朴な疑問を持つようになり、化学という学問が育ってきたわけである。 自然界の法則を見出すのが科学の出発点とするならば、自然界の物質を構成する原子・分子の構造、性質、絶えざる変化などを支配する法則を見出すのが化学の出発点である。物質を科学する学問と言え。その法則にのっとり、有限の天然物に代る、或いは天然物にまさる物質を作って、新しい文明の開拓に寄与するのが化学の役割と言えるであろう。物質のなりたちや機能をどのように理解するか的一端を紹介する。	第1回に化学プロローグとして、ろうそくを題材に化学が物質とその変化を研究する学問であることを概説する。 次に、物質を構成する原子・分子等が持つ特質や役割等の基本的事項を解説することで、物質のなりたちや、その機能を理解させる。 さらには、それぞれの元素や分子が持つ特質を利用した化学反応等の作用のしくみを述べ、後半では現代文明への化学の役割の一例として、高分子化学にスポットをあて、また化学という学問の将来にも展望する。
日本研究の先達 (ラジオ)	人文科学の諸分野における日本研究の先達とみなされる人々をとりあげ、日本認識のあり方を再検討する。	今日さまざまな場面で国際化ということがいわれている。そのことは、私たちの日本についての認識のあり方自体が、ふりかえって検討されなければならないことを意味している。 そこで本講座では、人文科学の諸分野において、近代的学問分野を切り開いた「日本研究の先達」の足跡をたどり、今日の国際化の中における日本のあり方について再認識する。	言語、文学、美学、文化・思想、歴史、音楽、民俗、地理といった人文科学の各学問分野において、近代の日本研究を切り開いていった人々を紹介し、その意義を現代的立場から考察する。

〈各科目の構成〉

(テレビ科目) 自然のしくみ ー化学の眼ー

主任講師：理学部 教授 菅 宏

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月4日	化学プロローグ ーろうそくはなぜ燃えるー	理学部教授 千原秀昭
第2回	10月11日	原子の世界	理学部教授 馬場 宏
第3回	10月18日	電子の働き	理学部教授 桑田敬治
第4回	10月25日	分子の形いろいろ	理学部教授 新村陽一 " 教授 村田一郎
第5回	11月1日	分子をつくる	理学部教授 小田雅司
第6回	11月8日	元素・分子を分ける化学の世界	理学部教授 池田重良
第7回	11月15日	原子・分子のあつまり ーエントロピ、水、超伝導ー	理学部教授 菅 宏 " 教授 金森順次郎
第8回	11月22日	感覚と分子 ー感じる、見る、におう、味わうー	理学部教授 芝 哲夫
第9回	11月29日	触媒と酵素 ー化学反応と生命の助っ人ー	理学部教授 池中徳治 " 教授 中村 晃
第10回	12月6日	変化する生体情報高分子 ー生物進化ー	理学部教授 松原 央 " 教授 小川 英行
第11回	12月13日	身の回りの高分子 ー生命からハイテクまでー	理学部教授 寺本明夫
第12回	12月20日	なぜ高分子が？ ー高分子物質の面白い振舞いー	理学部教授 小高忠男 " 教授 小林雅通
第13回	12月27日	高分子にかける夢	理学部教授 野櫻俊一 " 教授 中村 晃

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月18日	上田万年 -日本語研究の淵源-	文学部教授 徳川宗賢
第2回	10月25日	山田孝雄 -近代的日本文法理論の構築者-	文学部助教授 真田信治
第3回	11月1日	益田鈍翁 -日本美術の擁護者-	文学部助教授 伊井春樹
第4回	11月8日	横山重 -日本人の心を探る資料の 紹介者として-	文学部教授 信田純一
第5回	11月15日	岡倉天心 -近代日本美術運動の先達-	文学部助教授 神林恒道
第6回	11月22日	九鬼周造 -偶然性の哲学に触れて-	文学部教授 石田正
第7回	11月29日	内藤湖南 -日本文化研究の碩学-	文学部教授 加地伸行
第8回	12月6日	和辻哲郎 -その日本認識のあり方-	文学部教授 子安宣邦
第9回	12月13日	羽仁五郎 -行動の歴史家-	文学部教授 脇田修
第10回	12月20日	伊庭孝 -日本音楽の過去・現在・未来 を鳥瞰した人-	文学部助教授 山口修
第11回	12月27日	折口信夫 -「まれびと」論をめぐる-	文学部助教授 小松和彦
第12回	1月3日	志賀重昂 -「日本風景論」を中心に-	文学部教授 矢守一彦
第13回	1月10日	小川琢治 -近代地理学の主導者-	文学部助教授 高橋正

<スクーリング>

(テレビ科目) 自然のしくみ ー化学の眼ー

実施場所	実施日時
大阪大学基礎工学部国際棟 (豊中市待兼山町1-1)	昭和63年1月9日(土) 午後2時~4時

(ラジオ科目) 日本研究の先達

実施場所	実施日時
大阪大学文・法・経講義棟 (豊中市待兼山町1-1)	昭和63年1月16日(土) 午後2時~5時

<再視聴>

実施場所	実施期間・日時
大阪大学本部 (吹田市山田丘1-1)	昭和62年10月17日~昭和62年12月26日の毎週土曜日 昭和62年10月9日(金)、昭和63年1月5日(火)、 昭和63年1月8日(金)、昭和63年1月14日(木) (開設時間) 土曜日……………午前10時~12時 火・木・金曜日……………午前10時~午後4時